

多文化社会ハワイ州における教育の実態と展望

田 中 圭治郎

〔抄 録〕

ハワイ州はアメリカ合衆国の中でも典型的な多文化社会であるといわれている。教育も文化的多元主義を反映したものとなっている。本稿では、その歴史的経緯をたどり、なぜハワイ州の教育が多文化的な教育内容を包含する学校制度となっていたかを論じる。まず、最初は、欧米人がハワイに到来する以前のハワイ固有の教育はどのようなものであり、かつ欧米人の眼にはどのように映っていたかを述べ、次に、欧米人特にアメリカ人宣教師団がハワイの教育に与えた影響について述べる。ハワイ語重視の教育から英語重視の教育へとどのように変化していったか、その理由は何かを記述する。最後に、宣教師団による教育からアメリカ式の導入の過程の中で、すべての者に平等な教育制度が確立されていったことを論究したい。本稿では、1900年のアメリカ合衆国の併合までに、すでに、ハワイのアメリカ化がなされていたことを、教育の視座から論じたものである。

キーワード：アメリカ人宣教師団、ミッションスクール、「共通」学校、公教育制度、教育のアメリカ化

は じ め に

アメリカ合衆国ハワイ州は、合衆国の中でも、もっとも文化的多元主義が浸透している州である。学校においても、すべての民族の文化遺産を尊重し、子どもたちにお互いの文化を認め合う教育実践を行っている。その理由として、ハワイ州は1900年にアメリカ合衆国に併合される以前は、ハワイ王国、ハワイ共和国として独自の文化を持った独立国、すなわちハワイ独自の文化（ポリネシア文化）と欧米の文化（アメリカ文化、イギリス文化、ポルトガル文化等）の混合、融合した文化によって社会組織が機能していた国であった。本稿では、ポリネシア中心のハワイ固有の文化から、多文化融合の文化への移行により、教育がどのような変遷をたど

るようになったかを 1900 年にアメリカに併合されるまでの時期に限定して論じてみる。従来いわれているような、アメリカが軍事的にハワイを併合したのではなく、教育により内面的かつ精神的にハワイ王国をアメリカ化したことについてより詳しくのべることを意図している。

まず、第 1 章ポリネシア文化優位の時代（1820 年以前）の伝統的ハワイの教育についてのべる。

第 1 章 ポリネシア文化優位の時代（1820 年以前）の教育

ハワイは、外来の文化と隔絶された状況が長く続いていた。教育も、他の未開部族と同様に、経験・体験を重視した、家族教育・社会教育がすべてであり、学校のような形態の教育機関はなかった。

1 節 ハワイ固有の教育

ハワイの基幹産業は、1778 年ジェームズ・クックが来島するまで 1000 年以上にわたって農業と漁業であった。ハワイ社会では生産力が停滞していたため、子どもたちは大人たちが経験したことを伝達してもらえればそれで事足りた。「金属、書き文字と他の民族や文物との接触という刺激がないにもかかわらず、ハワイ人たちは決して単純な石器時代のままの生活を送っていたのではなかった」⁽¹⁾のである。教育とは、大人たちの農業、漁業の技術の経験を通して学ぶことであり、「教育の目標は、子どもたちに社会での役割を果たしうる成員として、十分に参加出来るように準備することであった」⁽²⁾すなわちハワイ人の子どもの教育内容・形態は、ハワイ社会の基本的価値と欲求を反映しているのである。また、ベッティ・ダンフォードは当時の教育について次のように述べている。「古代ハワイでは学校らしいものは何一つなかった。これは子どもたちが学習をする必要がないということでは決してない。彼らは、観察や手助けすることによって大抵のものを学習した」⁽³⁾とのべているように、生活の場からの学習が主であった。また、スツーパーも「彼らの民俗学、すなわち社会的、政治的、経済的、宗教的そして血族的制度の様式や組織によって、教育・学習の内容や方法が規定されていた。学習は、今日的な見方からすれば、すべての生活活動と密接に結びついていた」⁽⁴⁾と述べている。

まず、最初に家庭教育についてのべてみる。子どもが生まれ成長する過程で家庭は大きな役割を果たしている。

a. 家庭教育

原始共同体のハワイ社会では大家族制のため、家庭教育の占める割合が大である。伝統的なハワイ社会では、年長者が教師であった。両親、祖父母や他の家族構成員たちは、自分たちの技術を子どもたちに伝えるのであるが、それは以下の言い伝えからもわかるであろう。「両親のすることを、子どもたちはするだろう。両親の知識は、無意識に子どもたちに吸収され

る」。(5)

カマカウはこれに関して次のように述べている。「両親は死ぬまでに、子どもたちを教育する。息子たちには、農業と漁業を、娘たちには、タバを染めたり、敷物を織ることを」。(6)

また、メリー・K・ブクイは、彼女の祖母の教育について次のように述べている。「毎日、祖母は私に『われわれが昨日行った場所と、その場所を守ってくれるアウマクア(祖先の神)を思い出すか』とたずねる。そして、3日後に、『さあ、再び言ってごらん。アウマクアの名前は何かだったかね』」。(7)

祖母は、各家に伝わる祖先の神の祭っている場所へ子どもたちをつれて行き、その雰囲気を知らせることにより、神の存在を知らせ、その経験をくり返すことにより、自然に学ばせることを意図している。子どもたちが「責任を持つ年齢」に達し、地域社会での教育を受けるまで家庭教育が大きな役割を果たしていた。

次に、地域社会における教育についてのべてみる。ハワイは部族社会であり、各部族でそれぞれ独自の教育を行っていた。家庭教育が核が中心であったのに対し、地域社会での教育は、慣習、習慣、掟など地域社会の成員となるための教育が求められていた。

b. 地域社会での教育

ハワイでの社会経済上の土地の単位はアフプアとよばれる生産と分配に必要なものである。アフプアは、山から海岸までに直角に線が引かれた線と線との間の領域を示しており、そこに住む住民は、それぞれ独自の経済圏を形成している。これらの各地域は、森林資源、農産物、水産資源がそろっており、ほぼ自給自足ができる1つの経済圏を形成していた。

このような自給自足の社会の中で子どもたちは、地域社会の大人たちからいろいろなものを学んでいく。特に地域社会では、族長のリーダーシップの下で、さまざまな仕事が行なわれていく。農地を作る、穴を掘る、タロ畑をかんがいする、養魚場を作る、海岸で魚を養魚する、神殿を作る、宗教行事を行うといったことが、地域の成員によって取り行われる。子どもたちは、これらの作業を族長の指導の下に、学んでいく。

古代ハワイ社会は階級社会であるため、階級によって学習する内容も異なってくる。アリエ階級(王族、族長)の子どもたちは、槍投げ、槍突き、レスリング、ボクシングといった戦闘に必要な体育実技を学ばねばならなかった。これらを習得した後は、実践訓練が求められる。槍、こん棒、短刀、石を武器にして、模擬戦が行われるが、これらの行為はたいへん激しいものなので時として死人が出る。(8)

カフナ階級(聖職者、医者、教育者、職人)の子どもたちは、さまざまな技術や知識を身に着けることが求められている。医学を司る階級の子どもたちは医学に関する知識を教える「学校」で、熟練者たちからさまざまな知識を伝達される。(9)

カフナ階級へは、徒弟制度の下で、職人、商人等のさまざまな技術教育が教授され、また一般の人たちへは、日常生活を送るに必要な知識が教えられていたが、文字そのものが存在しな

いため、実生活に基づいた、経験を重視する教育が行われていたが、これは生活重視の教育といえよう。

マカアイナナ階級（農民、漁師）を中心とする労働者階級は、ハワイ社会の総ての生産を掌り、彼らが事実上ハワイ社会を支えていた。子どもたちは、大人たちが労働する姿を見ながら、経験に基づいていろいろなことを学んでいく。

2 節 欧米人の見た当時のハワイの教育

この時期のハワイの教育は、従来の伝統的な教育とはあまり大差がなかった。ここでは白人たちが当時のハワイの教育をどのように見ていたのか述べてみたい。

1826 年イギリス人 J・S・エマソンは、当時を思い出して次のように述べている。

「近所のいたるところで、五、六人の熟練した女性たちが、カパを打つことからくる鳴り響く音楽を聞くことが子ども心に大きな喜びであったことをよく覚えている。女性たちは、それぞれリズムカルに打つことによって、時として彼女たちの友人と簡単な電話のようなメッセージを送るといった音楽的な行為をすることに誇りを持っていた。」⁽¹⁰⁾

ハワイの女性にとってカパを作ることが教育であり、それは単に技術教育だけでなく、音楽、ヒューマンリレーションを教えることでもあった。生活に根差した総合的な学習といえよう。

この時期ハワイに滞在したイギリス人ウィリアム・デービスは次のように述べている。

「たいそう驚いたことなのだが、私がこの土地に滞在した間にこの諸島にはいかなる宣教師団も存在していなかった。大部分の白人は原住民の女性と結婚しており、そのため彼らは家庭を持っていた。しかしながら、彼らは自分たちの子どもの教育や宗教的教えに殆ど関心を持っていなかった。私はアルファベットの文字以上を知っていた子どもにお目にかかれなかった」⁽¹¹⁾

欧米人の子どもですら、近代的な意味での学校教育は受けることが出来なかったのが当時のハワイの実情であった。この時期の教育は、社会的変化にもかかわらず、伝統的な教育方法が支配的であったということが出来よう。

第 2 章 アメリカ人宣教師団が大きな影響を与えた時代 （1820 1839 年）の教育

ハワイの教育は、19 世紀初頭アメリカのニューイングランド地方から来たプロテスタントの伝導者たち（宣教師団）の影響が大である。彼らは、まず最初に、王族をキリスト教化し、次に庶民をも巻き込んでハワイ全体をキリスト教化することを意図する。その手段として使われたのが学校である。彼らが作ったミッションスクールがハワイのアメリカ化にいかに貢献し

たかについてのべてみたい。

1 節 アメリカの教育移植とハワイ化への動き(1820 1822 年)

最初のミッションスクールは、ピンガム夫人によってホノルルに設立された。これ以外に、教会が存在したハワイ島カイルア、カウアイ島ワイメアにも同じくミッションスクールが設立されていく。これは白人の夫とハワイ人の間に生まれた子どもたちが教育の機会が与えられないために作られた学校である。この学校は設立当時1820年5月には10人であったが、9月には40人に増加している。この学校の生徒は、成人と子どもが半々であり、知事、彼の妻と娘といったハワイ人支配階級の人たちも含まれていた。カメハメハ2世を初めとする王族たちは、当初カイルアのミッションスクールで学んでいたが、後にはホノルルのミッションスクールで学ぶようになる。⁽¹²⁾

教科書はすべて英語であり、新訳聖書、ウェブスターの綴り方の本、アメリカンプリマーが使用されていた。この学校では完全にニューイングランドのやり方がなされ、特に試験方法はハワイ人の間では一般的となり、多くのミッションスクールのモデルとなる。学校の目的として、当時のミッションレポートには、以下のように述べられている。「学校は、族長や民衆に対して、誠心誠意の気持ちを持たせ、生き生きさせるような生活を送らせることである。すなわち、彼らに自分たちが存在していることを新たに認識させ、そうすることによって、彼らが考え、行動できるようにする」⁽¹³⁾

宣教師たちは、王や族長に特別な教育を与え、それ以外の成人男女、子どもには機会があれば、教育を与えた。王族たちは、欧米への関心の高さから、さらに知識独占を意図し、アメリカ人からの英語教育を積極的に求めた。また、アメリカ人宣教師たちも、支配階級特に王族の協力なしでは布教活動が出来なかったため、王族ないし、その子弟の教育に力を入れた。

彼らは庶民にも、伝導すべきキリスト教の中心となる聖書を英語で教えようとしたが、王族に対するのとは違って、仲々うまくいかなかった。そこで、庶民が日常的に話すハワイ語での布教を意図したが、ハワイ語には書き文字が存在せず、彼らがそれをローマ字化する必要に迫られていたが、彼らアメリカ人にとってハワイ語(カナカ語)は耳に入りにくく、ローマ字化は困難をきわめた。当初の2年間は彼らの伝導は失敗の連続であった。

1822年7月ロンドン伝導協会のダニエル・ティーアマンとジョージ・ベネットがハワイにやって来たが、それらのメンバーの中にウィリアム・エリスがいた。彼はタヒチ島で6年間伝導活動に携わっており、タヒチの言葉に堪能であった。彼はハワイ滞在2,3週間ですぐに、ハワイ語を習得することが出来た。ハワイ語はポリネシア語の一部分であるため、タヒチ語の堪能なエリスにとっては、ハワイ語の習得は容易であった。アメリカ人の宣教師団の人たちは、ハワイ語のローマ字化にエリスの助力を求めた。エリスの協力により、聖書ないし様々な教科書類が順次ハワイ語に翻訳され、教会や学校でハワイ語での教育が行われるようになって

いく。⁽¹⁴⁾

しかしながら、エリスでも、カメハメハをタメハメハ（Tamehameha）と綴っている。それでもクックがマイハマハ（Maihamaiha）と、またバンクーバーがタマアマア（Tamaamaah）と綴るより、はるかに発音に近い綴りとなっていることは事実であろう。

2 節 ハワイ語による教育とミッションスクールの隆盛（1823 1829 年）

ハワイ語による印刷物の出現とともに、ハワイ人の間に急速にアメリカ宣教師団の価値観が浸透してくる。1822 年聖書が翻訳され、キリスト教が一般庶民に広まると同時に、ハワイ最初の新聞ラマ・ハワイ、クム・ハワイが刊行され、ハワイ人庶民階級の啓蒙に力が注がれるようになる。また、学校では、ハワイ最初の教科書パラパラ及び綴り方の本が使用されるようになる。パラパラ（ハワイ語で手紙の意）は、道具や身の回りの物事の説明を加えることによって、生徒に読み書きの初歩が教えられた。各地の族長たちは、パラパラを学習することによって、短期間に文字を読み、わずかばかりの文字が書けるようになる。そこで、支配者たちは、すべての成人がピアパ（Pi-a-pa、ハワイ語の abc）を学習しなければならないという命令を出す。⁽¹⁵⁾

1824 年ハワイ最初の法律（common law）が公布され、この法律の中で、総てのものがパラパラを学習せねばならぬことが規定されていた。この法律に対して反対する人々が多かったにもかかわらず、カアフマヌを中心とするハワイの支配層たちは、1825 年、1827 年にその学習を強化する法律を施行することによって、庶民教育の強化を図った。

当初の生徒のほとんどは成人であり、学校教育は、成人の読み書き能力を得させることを目的としていく。年とともに子どもが徐々に増加していくが、成人の生徒数をこえることはなかった。

3 節 ミッションスクールの発展・衰退と「共通」学校の成立（1830 1839 年）

本節ではミッションスクールと「共通」学校の関係について論じる。ハワイの「共通」学校は、アメリカ本土の共通学校（コモン・スクール）と異なるのは、州政府（公権力）の関与した公教育ではなく、地域社会がそれぞれ独自に、てんでばらばらの小学校であったことである。そこで本稿ではかっこ付きの「共通」学校として記述する。

1830 年まで急速に増加しつづけたミッションスクールは、この時期に入ると急激に減少する。表 1 は、1830 年から 1840 年にかけてのミッションスクールの推移を示したものである。この表をみると、1831 年までは増加の傾向を示している。1831 年の生徒数 44,895 人が 1838 年になると、8,100 人から 9,100 人と 5 分の 1 に減少している。また、学校数も 1831 年の 908 校から、1839 年の 200 校と 4 分の 1 以下に減少している。この減少がどの年から始まったかは、この表が不詳の部分が多いために不明であるが、1835 年には既に減少しつつあったと推

測される。これは、「共通」学校の出現・普及と関連していることは事実であろう。

表1 プロテスタント・ミッションスクール⁽¹⁶⁾

年	学校数	教師数	生徒数
1830	674	不詳	39,208
1831	908	900	44,895
1832	不詳	不詳	不詳
1833	不詳	不詳	不詳
1834	不詳	不詳	不詳
1838	不詳	不詳	8,100 ~ 9,100
1839	200	不詳	14,000
1840	不詳	不詳	15,000

プロテスタント宣教師団の人たちは、ミッションスクールを作ることにより、当初は成人を、後には子どもたちを教育することに骨を折ったが、彼らの目標は、ハワイにキリスト教の王国を確立することであり、総ての民衆の教化を意図していた。また、彼らの出身地ニューイングランド地方では、早くから公教育の思想が普及しており、アメリカの公教育はニューイングランド地方の教育を母体としているといわれており、彼らの教育制度をハワイに持ち込もうとした。そこで彼らの指導の下に、アメリカ式の公教育制度をハワイに導入することになる。

ミッションスクールが主として成人を被教育者とし、また教会付属の教育機関であったのに対して、「共通」学校は、各地域社会に1校公的な性格を持った学校を作ることであり、その地域社会に居住する子どもたちは、学校出席が義務づけられる。1830年代に数が増えだした「共通」学校は、「ミッションスクールの真近くではなくなり、むしろ各地に散在するようになる。それらは、ある時期または特定の場所では、かなり繁栄したが、他の場所や異なった時期においては、かなり衰退したり、消滅した」⁽¹⁷⁾ ミッションスクールが、教会という後ろ盾があったのに対して、庶民学校は各地域の状況により、繁栄したり、衰退したり千差万別であったことが窺われる。

この義務教育制度は、アメリカの影響を受けた、1824年の学校法に負うところが大きく、この法律により、庶民が学習すべきであるという考え方が一般化していく。「共通」学校は、1830年代になると、各地の族長たちの支持の下に隆盛を遂げるようになり、1834年には、王族や族長たちが、様々なミッションステーションに、恒常的な校舎建設のための用地を提供するのに同意している。1831年には、1,000校もの学校が存在し、5万人のハワイ人成人たちが通学していたが、教育内容は、スリーアールズと教義問答が中心であり、ミッションスクールとあまり大差がなかった。⁽¹⁸⁾

「共通」学校がミッションスクールと異なるのは、それらの学校が、主としてハワイ人自身の手で運営されていたことである。⁽¹⁹⁾ ミッションスクールの教師がアメリカ人中心であるの

に対して、「共通」学校の教師はラハイナルナ・セミナリーの卒業生であるハワイ人で占められている。E.D. ホールによれば、1835 年「共通」学校の生徒数は 1,847 人であり、そのうち子どもはわずか 610 人にすぎなかった。学校の期間は、場所により 7 週間から 48 週間と異なっており、平均は 30 週間であった。そして、各週 1 日から 5 日とかなり幅がある。⁽²⁰⁾

1830 年代においては、ミッションスクールが衰退し、それに代わるものとして「共通」学校が出現してくるが、まだ近代公教育制度における共通学校ないし公立学校には程遠いものであった。この時期は、成人を対象とする学校から、子どもを対象とする学校への移行期であり、真に近代公教育が確立するのは 1840 年の学校法成立後まで待たねばならない。

第 3 章 公教育制度成立の時期（1840 1899 年）

この時期は「共通」学校が公教育化していく過程である。この意味でアメリカ本土の共通学校へと変化していく時期であろう。

1 節 義務教育化時期（1840 1872 年）

1840 年を境としてハワイの「共通」学校は、公教育化の方向をたどるようになる。これは、1840 年憲法の教育規定によるところが大である。「15 人以上の学齢期の子どもがいるすべてのコミュニティは、学校を作らなければならない」とあり、各コミュニティに 1 校小学校（「共通」学校）の設置を求めている。また、就学年限は「4 歳から 14 歳までのすべての子どもたちは、学校に通学しなければならない」⁽²¹⁾と定めている。

学校の運営は学務委員会（school committee）があたり、これはそのコミュニティの父母によって選出される。だが、学校運営については、プロテスタント宣教師団が大きな影響力を持っている。「その土地の宣教師団、税務官と学務委員会が教師を選ばねばならない」とあるように、プロテスタントの意向に合致しない教師は採用されないのである。

1840 年のハワイ最初の憲法により、王国が小学校（「共通」学校）を経営するようになる。学校経営は各地方の学務委員会とプロテスタント宣教師団とによって行われており、教師の採用、解雇は宣教師団の意向が反映していた。これに対し、カトリック教団からの反対が強く、1842 年の法律が修正され、従来使用されていた「宣教師団」という言葉が「学校監督官」という名称に変えられたが、実態はあまり変化はなかった。1842 年の学校法の修正により、各島に学校監督官、ハワイ王国に 1 人の教育長（superintendent）を置くことが規定された。デビット・マロが最初の王国教育長兼マウイ島（当時の首都ラハイナはマウイ島にあった）学校監督官となる。マロは熱心なプロテスタントで、1839 年の宗教的寛容の布告を無視し、プロテスタント寄りの教育行政を行ったが、彼の時代は各島の学校監督官からの報告もあまりなく、教育行政は活発ではなかった。

1847年、プロテスタントの宣教師アームストロングが文部大臣に就任したとき、公教育制度とは名ばかりのものであり、以下の問題点が存在した。

- (1) 政府により任命されて職員によって管理される1つに統合される制度を作るための組織体が必要である
- (2) 教育の改善のための教育監督制度が求められる
- (3) 教師資格の水準の引き上げが求められる
- (4) 宗派間の調停が必要とされる
- (5) 一般民衆に公教育の重要性を認識させることが必要である
- (6) 王国の税収入から教育により多くの支出を求めるための政治的な活動が必要である⁽²²⁾

アメリカ人アームストロングにとって、このような状況はアメリカ公教育制度とはかなり掛け離れたものであり、彼自身ハワイの教育改革の必要性を再認識したのであった。13年間にわたる在任中、彼はハワイにアメリカ式の教育制度を導入するのに努力するのであるが、その具体的な方法としては、ハワイ人と非ハワイ人共に学校での教授言語を英語とすることである。当時、ハワイ社会では、すでに商業と政治において使用されている言語は、英語となっていたが、学校においてはハワイ人子弟はハワイ語で、非ハワイ人子弟は英語で教育を受けるのが一般的であった。彼は、「共通」学校の英語化を図り、まず英語で教育する「共通」学校を作るための法律を作る。

アームストロングは、1854年の法律で小規模な「共通」学校を統合し、無宗派の政府立の小学校すなわち公立学校(public school)の設立を図る。これにより、ミッションスクール、「共通」学校と宗派立学校が近代的な公教育へと脱皮していく。アメリカ本土の小学校が、無宗派となっていくのと同じ道をハワイが歩むことになったのである。

1865年前後で、ハワイの教育のカリキュラムは大幅に変化してくる。それ以前は、プロテスタント宣教師団作成のハワイ語の教科書が「共通」学校で使用されていたが、それ以後アメリカ本土の教科書のハワイ語訳が使用されるようになる。特に、1872年アメリカ人の商人であり、ハワイの王女バーニス・パウアヒと結婚し、後にビショップ財団、カメハメハスクール等ハワイ人の民族文化覚醒に努力したビショップが教育長になると、彼は宣教師団の影響を断ち、かつハワイ人の要求を受け入れながら、ハワイ教育のアメリカ化を強力に推進していく。

2節 教育制度充実の時期(1873 1892年)

この時期は、アメリカ本土のホレス・マン、ヘンリー・バーナード等の公教育思想の立場をとる教育者の影響が大きな時期である。彼らは、教育により社会は進歩すると信じており、出来るだけ多くの子どもたちが学校に通うことがハワイ社会の近代化に必要なだと思っていた。特に、近代化のためには英語での教育が必要であり、ハワイ語での教育は消極的支援ないし否定する方向へと進んでいく。

この時期においては、教育・文化のアメリカ化が進んだことは事実であるが、特に教育制度において、アメリカの教育委員会制度がより定着の方向に向かう。ヒチコックは、1877 年まで総視学を勤め、その後 D・ドワイト・ボルドウィンが後を引き継ぐ。また、教育委員の方も、ケフアナオア、ヴァリニとスタンレーが 1869 年退任し、チャールズ・R・ビショップがその任に当たる。ビショップは、ルナリロ王、カラカウア王の在任中（1883 1887 年以外の期間）は、ずっと教育長であり、1877 年、ヒチコックが引退するまでは、ビショップとヒチコックが、1877 年以降はビショップとボルドウィンがハワイ王国の公教育に大きな役割を果たす。

1878 年、「共通」学校の生徒登録数は、同年齢人口の 61.8% であるのに対して、10 年後の 1888 年にはわずか 15.7% に落ちる。これは「共通」学校に通うよりは、政府立英語学校に通学する生徒が増加してきたためであり、同じく 1888 年に英語学校は無月謝になり、王国崩壊 1 年後の 1894 年には、「共通」学校は過去のものになり、ハワイ語で授業している学校はわずか 2.8% になる。表 2 は、「共通」学校の学校数、生徒数の変遷を示している

表 2 「共通」学校、英語学校の学校数と生徒数の変遷⁽²³⁾

年 代	「共通」学校数（生徒数）	英語学校数（生徒数）
1848	527 校（19,028 人）	不詳（不 詳）
1858	293 校（8,628 人）	16 校（不 詳）
1868	219 校（6,218 人）	不詳（1,880 人）
1878	169 校（4,313 人）	11 校（943 人）
1888	63 校（1,370 人）	69 校（4,772 人）
1894	18 校（320 人）	107 校（7,732 人）
1897	1 校（26 人）	131 校（10,542 人）

表 2 をみると、ミッションスクールにとって代わった「共通」学校が、アームストロングの時代に全盛であることがわかる。1860 年代後半から徐々に減少しつつあった「共通」学校は、70 年代に入るとその速度は速くなり、80 年代になると、英語学校と学校数、生徒数共に逆転してしまう。

総視学アトキンソンの報告によれば、1888 年時点において、「共通」学校数 63 校（生徒数 1,370 人）、英語学校数 69 校（生徒数 4,772 人）⁽²⁴⁾ となっており、両者共学校数にはあまり差がないが、生徒数は後者の方が圧倒的に優る。

これらの学校の変遷に伴い、ハワイ語での教授から、英語での教授への転換がなされ、文化的にもハワイ文化が衰退し、アメリカ文化がそれにとって代わっていく。

3 節 教育のアメリカ化の時期（1893 1899 年）

1893 年ハワイ王国が崩壊し、アメリカ人ドール大統領の下、ハワイ共和国が成立する。こ

の状況の下で、ハワイの教育は完全なアメリカ化が求められていく。しかしながら、学校形態として、すべての子どもが通う共通学校だけでなく、白人の子どもが通う私立学校、ハワイ支配階級が通う王立学校が並存し、複線型学校制度が1960年代まで続いていくことになり、真のアメリカ型の学校制度成立には程遠いものである。

政治的・経済的にアメリカに依存するようになると、教育も急速にアメリカ化する。従来、ハワイ王国の下にあった教育は、ポリネシア文化と欧米文化の混合により成り立っていたが、1893年以後はアメリカ文化が優位になっていく。

ハワイ共和国になると、政府の財源から宗派学校や私立学校への支出が禁止され、公立学校と私立学校が明確に区別されていく。

1896年に成立した教育法では、(1) 総ての公立学校の教授言語は英語であることが求められ、(2) 教育委員会から聖職者が排除され、(3) 公教育は、政府とは別個の行政組織である、と規定されている。⁽²⁵⁾ この法律は、学校教育が、宗教から独立していくと同時に、ハワイの学校において英語が支配的となり、アメリカ文化がハワイ文化を凌駕するようになることを示唆している。

この時期になると、初等教育が普及していくと同時に、中等教育への欲求が高まってくる。中等教育機関としては、プロテスタント宣教師団が作ったラハイナルナが存在するが、これは初等教育教員養成機関であり、程度は初等教育機関よりはレベルが高いが、厳密な意味でのアメリカ本土のハイスクールではなかった。

ラハイナルナ以外に数多くの師範学校が存在したが、本格的な公立機関としては、1895年設立されたホノルル・ハイスクールが最初である。この学校の前身は、フォートストリート・スクールという名称の初等教育機関高等部に相当する小学校教員訓練機関であった。1888年に総ての政府立英語学校が無月謝となるに従い、中等教育機関の必要性が求められるため、このような高等部に新たに普通科を中心とするコースが併設される。この学校の目的は、「ハワイ青少年にたいそう高度な教育を与え、アメリカ本土の大学の総ての課程を学習出来るに必要な教育を与える」⁽²⁶⁾ ことであり、また、教育内容としては、アメリカ本土のカリキュラムと同じものが採用されており、語学(ラテン語、ドイツ語、フランス語)、文学、数学、科学(天文学、地質学、初等物理、化学)、絵画、音楽と公民が教えられていた。

1840年から1899年までのハワイ教育は、1840年の憲法により、従来のミッションスクールが否定され、「共通」学校が誕生する。しかし、この学校はアメリカ本土のように総ての子どもが行く学校ではなく、庶民の子どもだけに限定された学校であり、支配層の子どもは、族長子弟学校(Chiefs' Children's School, 1839年設立)、後には王立学校(Royal School, 前者は1846年に改編したもの)に、白人の子弟ないし、白人との混血の子どもたちは、プナハウス쿨に代表される私立学校(Independent School)にそれぞれ通学するといった複線型学校制度をとっており、この状況は政府立英語学校が設立された後においても、変化はなかった。

19世紀後半、中等教育への欲求の高まりと共に、アメリカのハイスクールが持ち込まれ、更に、20世紀に入ってハワイ大学が設立されるにつれて、ハワイの複線型教育制度は徐々に崩れていく。この時期は、ハワイ王国の複線型学校制度が、アメリカの影響で単線型学校制度へと移行し、またそれと同時に伝統的なハワイ文化の衰退・アメリカ文化の台頭へと移行する前兆の時期でもあるといえよう。

お わ り に

ハワイの教育はポリネシア人のハワイ王国の基礎の上に成立したため、アメリカ本土のようにネイティブ・アメリカンを排除した上で、白人のみの学校を作ったのとは趣を異にする。庶民教育においては、ハワイ人の、ハワイ語による教育が出発点となり、その上にアメリカ型の教育が移植されたため、ポリネシア文化と欧米の文化が融合したものとなるのは自然の成り行きであった。しかしながら、ハワイの社会では、ハワイ人の支配階級の人々と白人の子どもたちの学校が別々に設立されたため、そこでの使用言語、教育内容、卒業後の進路は当然のことながら異なっていたことは言うまでもない。アメリカ本土の共通学校がハワイに導入されても、本来の機能を果たすことが出来ず、複線型学校制度の一翼を担っているにすぎなくなっている。本稿は、ハワイ人の庶民の教育、後にはアジア人の移民の教育がこの状況の上に確立されていくことへの将来的展望を示唆する。

〔注〕

- (1) Ralph K. Stueber, 'An Informal History of Schooling in Hawaii', "To Teach the Children—Historical Aspects of Education in Hawaii", Bernice Pauahi Bishop Museum, 1982, p.19.
- (2) Marion Kelly, 'Some Thoughts on Education in Traditional Hawaiian Society', "To Teach the Children" p.4.
- (3) Betty Dunford, "The Hawaiians of Old", The Bess Press, 1980, p.43.
- (4) Stueber, Ibid., p.20.
- (5) Kelly, Ibid., p.9.
- (6) Ibid., p.10. 女性は、成長とともに、そのタバコ製造技術の向上が求められる。タバコ製造については、Margaret Titcomb, "The Ancient Hawaiians—How They Clothed Themselves", Horgan Press, 1983. に詳しい。
- (7) 教育学者ウイストによれば、このような生活重視の教育は、20世紀に入ってハワイに持ち込まれたデューイの進歩主義教育と相通じるものがある。すなわち、実生活に基づいたカリキュラムを用いることによって、理論と実践を結び付けようとした。
- (8) Renard Lueras ed. "Hawaii", Apa Productions, 1981, pp.33–34. ハワイでの戦闘はまず、神に祈りを捧げ、神の加護の下で始める。戦闘開始日は神から与えられた理想的な日が求められる。そして、槍、石などを使用して集団での戦闘に入るわけであるが、戦闘がこう着した場合や、双方犠牲を多く出した場合、両集団の代表者の戦いで勝敗を決する場合もある。ただ、戦闘の結果勝敗が決定的になった場合、勝者は敗者にたいして寛容ではない。ほとんどの敗者には死が待っているだけであり、運がよかったとしてもアライ階級から脱落しカウワ階級に入れられる。

- (9) ハワイでの医学の教授は、地面に人体の絵を描き、その絵を基にして、年長者である教師が子どもたちにいろいろな医学的知識を教えた。
- (10) Ralph S. Kuykendal, "The Hawaiian Kingdom vol. 1. 1778-1854", The University Press of Hawaii, 1938, Ibid., p.6.
- (11) Archibald Campbell, "A Scotsman in Honolulu", A. Grove Day and Carl Stroven ed., "The Spell of Hawaii", Mutual Publishing, 1968, p.98.
- (12) ミッションスクールは、ステーションスクール (Station school) とも呼ばれていた。ハワイ諸島各地に教会が建てられ、それらの教会に学校が付設されるのであるが、それらの教会の位置を Station と呼び、それらの学校をステーションスクールと呼ぶ。また、生徒のうち成人が大きな割合を占める時期においては、それらはアダルトスクール (adult school) とも呼ばれていた。ここでは、それらの学校をミッションスクールに統一した。
- (13) Ralph K. Stueber, "Hawaii: A Case Study in Development Education 1778-1960", (unprinted doctoral thesis), 1964, p.48.
- (14) Grove Day and Carl Stroven edited, "The Spell of Hawaii", Mutual Publishing of Honolulu, 1968, p.129.
- (15) Benjamin O. Wist, "A Century of Public Education in Hawaii", The Hawaii Educational Review, 1940, p.22.
- (16) Robert C. Schmitt, "Historical Statistics of Hawaii", p.211.
- (17) Ralph S. Kuykendall and A. Groove Day, "Hawaii: A History from Polynesian Kingdom to American Statehood", Prentice-Hall, 1976, pp.109-110.
- (18) Ralph K. Stueber, 'An Informal History of Schooling in Hawaii', "To Teach the Children", Berinice P. Bishop Museum, 1982, p.20.
- (19) Wist, Ibid., p.31.
- (20) Ibid., p.31.
- (21) Philip Richard Brieske, "A Study of the Development of Public Elementary and Secondary Education in the Territory of Hawaii", (unpublished doctoral thesis), 1961, p.44.
- (22) Wist, Ibid., p.56.
- (23) Schmitt, Ibid., p.104.
- (24) W.D. Alexander and Alatau Atkinson, "An Historical Sketch of Education in the Hawaiian Islands", The Board of Education of the Hawaiian Kingdom", 1881, p.6.
- (25) Brieske, Ibid., p.76-77.
- (26) Ibid., p.78.

〔付記〕

本稿は平成15年度佛教大学特別研究助成を受けておこなった研究の成果の一部である。

(たなか けいじろう 教育学科)

2003年10月15日受理

